

トマス・アクィナス著
SUMMA CONTRA GENTILES の
現代的解釈（6）

Bonazzi Andrea
北川 朋子

第一卷

De Dei bonitate

第37章 神は善であること

303.

さらに、我々がすでに示した神の完全性から（第28章）、神の善性を結論づけることができる。

304.

というのは、善いものはすべて善といわれるわけは、それぞれに固有な特性（virtus）があるからである。なぜなら、「特性とはそれを持っているものを善にし、その働きを善へと導くものである」（『ニコマコス倫理学』[1106a15-17]）からである。ところで『自然学』（第7巻 [246b28-29]）で明らかのように、特性とは「何らかの完全性である。したがって、完全であると言われるそれぞれのものが、それがその固有な特性に達した時である。」⁽¹⁾そこから、それぞれのものが善であるのは、それが完全であることによるのである。だからこそ、それぞれのものは自己の完全性を固有の善として欲求するのである。ところですでに示したように（第28章）神は完全である。したがって、神は善である。

305.

同じく先に示されたように（第13章）、何か第一の不動の動者が存在し、それが神である。しか

キーワード：トマス・アクィナス，対異教徒大全，キリスト教思想史，哲学，神学

(1) 例えば、メロンは熟した時に、おいしくなる。その固有な完全性に達したのである。完全に熟していないメロンはやはりまずい味がする。中途半端に訳された文書の意味は伝わらない。

し、神はまったく動かされずに動かすものとして動かしているのである。これは欲求されるものとして動かす。したがって、神は第一の不動の動者であるから、第一に欲求されるものである。何らかのものが欲求されることには、二つの仕方がある。それというのは、善であるか、あるいは、善に見えるかどちらかである。第一に欲求されるものは、善である。なぜなら、善に見えるものが動かすのは、自らによってではなく、何らかの善の外観を持つことによってである⁽²⁾。だが、善は自らによって動かすのである。したがって、第一に欲求される神は、真の意味で善である。

306

さらに、アリストテレスが『倫理学』第1巻 [1094a2-3] で導入した、「善とは万物が欲求するものである」という最も適切な表現がある。ところで、万物はその様態にしたがって現実態において存在することを欲求する⁽³⁾。これは、それぞれのものが、その本性にしたがって消滅することを嫌うことから明らかである。したがって、現実態において存在することは善という概念の構成要素である。それゆえにまた、可能態から現実態を奪取することによって、善の反対である悪が生じるのである。哲学者〔アリストテレス〕がこのことを、『形而上学』第9巻 [1051a5-17] で明らかにしている。ところで、先に示されたように（第15章）、神は可能態のない現実態の存在である。したがって、神は真の意味で善である。

307

さらに、存在と善性の伝達は善性から発出する。このことは確かに善なるものの本性そのものと、その概念との両方から明らかである。実際、本性上、それぞれのものの善とは、その現実態であり、その完全性である。ところが、それぞれのものが作用するのは、現実態にある限りである。ところで、作用を行うことで、存在と善性をその他のものに流布させる⁽⁴⁾。それゆえにアリストテレスが『気象学』第四巻 [380a14-15] において明らかにしたように、「類似したものを生み出すことができる」ということは何らかの完全性のしるしである。それに対して、善なるものの概念の方は、欲求されるものであるということに由来している。つまり、それが目的である。さらに、それが作用者を作用するように動かすのである。このことから、善は「自己と存在とを流布させる⁽⁵⁾」ものであ

(2) 例えば、ブランドが欲求されるのは、格好よさ（つまり、他人からよく思われたい）のゆえであろう。したがって、第一に欲求されるのは、他人からよく思われたいということである。

(3) 例えば、板前の見習いは一人前の板前さんになりたがる。ピアノの練習をした音楽家は、コンサートで人々の前でピアノを弾きたい。ペットショップにいる犬は、誰かのペットになって可愛がってもらいたい。

(4) 暖かいストーブが暖かさを伝達し、暖かい体を存在させる。

(5) “Bonum est diffusivum sui”, De divinis nominibus, IV, § I. ここに「流布する」と訳した diffusivum は、diffundere [dis-fundere]（まわりに・そそぐ、拡げる）という意味である。例えば、太陽は光と熱を流布し、食べ物は栄養分を与え、生物はいのちを伝達する。あるいは、心に平和を持つ人は周りに平和な雰囲気を作り出す。これはプラトン（正確に言えば、新プラトン主義）的な発想で、「最終目的因」（causa finalis）として欲求される善はアリストテレス的な発想である。ここで、トマスがギ

ると言われるのである。ところで、この流布は神に適合する。なぜなら、先に示されたように（第13章）、神はそれ自体で必然的な存在として、他の事物にとっての存在の原因だからである。したがって、神は真の意味で善である。

308

だからこのことは、「詩篇」（73・1）においても、「神はイスラエルに対して、心の清い人に対して恵み深い⁽⁶⁾」と表現される。また、「哀歌」（3・25）においても次のように語られている。「主に望みをおき尋ね求める魂に、主は幸いをお与えになる⁽⁷⁾」。

第38章 神は善性そのものであること

309.

以上のことから、神が自らの善性であるという帰結が得られる。

310.

なぜならば、あらゆるものにおいてその善とは現実態に存在することである。ところが、神はすでに示したように（第22章）現実態の存在者だけでなく、それ自身の存在そのものである。したがって、神は善であるばかりでなく、善性そのものである。

311.

さらに、各々のものの善性は、すでに示されているように（前章）、その完全性である。ところで、神的存在の完全性は、自分自身に何か付加される仕方で成り立つものではなく、それは、すでに示されたように（第28章）、それ自らによって完全である。したがって、神の善性は、自らの実体（*substantia*）に付加された何らかのものではなく、自らの実体そのものは善性である。

312.

同様に、自らの善性ではない各々の善は参与によって善であると言われる。ところで、参与によって善と言われるものは、あらかじめあるものを前提とし、そのものから善の特質を受け取るのであ

リシア哲学の伝統の中で平行線をたどっていた異なる立脚点を自分の形而上学の中でうまくことに統合させている。「類似したものを生み出すことができる」というのは善の作用性であり、トマスはアリストテレスの中でプラトンの要因を見つけ出した。さらに、トマスが善を現実態の観点から捉えていることも注目に値する。“[I] t belongs to act to fulfill itself by actualizing others, and the good is what all things desire; act as expansive or communicative and act as desirable are identical in the act of existing” (O'Rourke. T.S. Hibbs, op. cit. より参照)。実は、トマスの哲学の中で、被造物における「存在の現実態」(actus essendi) と本質ないし実体の区別は、もっとも独創的なところ、根幹をなすところとされている。この区別は、新スコラ哲学の祖とされるスアレス (Francisco Suarez) 以来失われてしまい、この喪失こそが近代哲学の出発点にある。これについて、**C.Fabro, Neotomismo e suarezismo, Piacenza 1941. C.Fabro, Introduzione a S.Tommaso. La Metafisica tomista e il pensiero moderno, ed. ampl., Ares, Milano 1997**を参照されたい。

(6) “Quam bonus Israel Deus his qui recto sunt corde”.

(7) “Bonus est Dominus sperantibus in se, animae quaerenti illum”.

(8) する。さて、このようなことは、無限にさかのぼることが不可能である。それというのは、目的因の探求は無限に進まることがないからであり、目的は無限と矛盾するからである。ところで善は目的的特質を有している。(9) したがって、何らかの第一の善に至るの(10) でなければならない。それは何か他のものへの関係によって参与的に善であるのではなく、自らの本質によって善である。さて、このようなものは神である。したがって、神は自らの善性である。(11)

313.

同じく、存在するものは別のものに参与することができるが、しかし存在そのものは、何ものにも参与することはできない。なぜなら参与するものは、可能態であるが、存在は現実態だからである。だが、神はすでに証明されたように(第22章)、存在そのものである。したがって、神は参与によって善であるのではなく、本質によって善である。

314.

さらに、単純なものすべては自らの存在と何性を同一のものとして有している。なぜなら、もし両者が区別されるならば、すでに単純性が取り除かれることになるからである。ところで、すでに示したように(第18章)、神は完全に単純である。したがって、神が善であるということは、神自身とは区別されることはないのである。それゆえに、神は自らの善性である。

315.

さらに同じ根拠から、神以外のいかなる善もそれ自身の善性ではないことが明らかである。それゆえに、マタイ伝(19・17)で「善い方はおひとりである」と語られているのである。

第39章 神のうちには悪はあり得ないこと

316.

さて、以上のことから神のうちには悪はあり得ないことが明らかである。

317

というのは、存在性や善性など、本質を通して語られるすべてのものは、自己自身のほかに混じり(12) ありあっているいかなるものも持たないからである。それに対して、「存在するもの」(13) や「善いもの」(14)

(8) 例えば、「漬物」の善さとなっている特別な味は、別のものからもらっている。「塩漬け」、「味噌漬け」はそれぞれ別のものに参与する。

(9) たくあんを作る目的で糠に漬けるのである。たくあんは糠の性質を受け取る。これで、たくあんの善性に十分な説明がつく。糠はその性質を麹から受け取っている。さらに麹は土から何かを受け取っているなどなど、目的因の系列を遡っていけば、最終的には創造主の善性にたどりつく。

(10) 漬物の善さは「意図的に狙われる」ものであり、一定の味を得るために漬ける時間は決まっている。それ以上に漬けたらまずい味になる、つまり、善さはえられない。善は狙われるものとして目的の性質を持っている。

(11) 自分自身の善性であるような存在者は神以外はないのだが、人間にもそれに類似したことがらがある。たとえば、カントが言うように人間はいつも目的であり、単なる手段にならない。

は善性の外に何かを持つことがあってもかまわない。なぜなら、或る完全性の基体となっているものが他の完全性の基体となっても何の支障もないからである。例えば、物体であるものは、白いものであるに加えて、甘いものであってもかまわない。これに対して、各々の本性は、自らの定義（ratio）の限界のうちに閉じ込められており、その内部のうちに外在的ないかなるものも取り入れることができないのである。⁽¹⁵⁾だが、神はすでに示されたように（前章）、善であるのみならず、善性である。したがって、神において善性でない何らかのものはあり得ないのである。それゆえに、神において悪はまったくあり得ないのである。

318

さらに、何らかの事物の本質の正反対のものは、事物がとどまる限り、その本質と全く結合することはできない。⁽¹⁶⁾例えば、非理性性と非感受性は人間であることをやめない限り、人間において結合することはないのである。⁽¹⁷⁾だが、神の本質はすでに示されたように（前章）、善性そのものである。したがって、善の正反対である悪は、神において居場所を持つことはあり得ないのである、神が神であることをやめない限り。しかし、それは不可能である。というのは、先に示されたように（第15章）、神は永遠だからである。

319

さらに、神は自らの存在であるから、先に導かれた理由から明らかなように（第38章）、神について参与的に語ることは何もないのである。したがって、もし悪が神について語られるのであれば、参与的ではなく、本質的に語られることになるであろう。ところが、悪はどんなものについても、何らかのものの本質であるかのように語るができないのである。というのは、すでに示されたように（第37章）存在は善であるから、何らかのものが本質的に悪いのであれば、それに存在までも欠如してくることになるのである。⁽¹⁸⁾ところで、悪性において、善性においてもそうであるように、

(12) 例えば、「人間性」と言うときに、そこには肌の色とか、背の高さとかその他のことは一切含まれていない。「背の高い人間」というときに、そこに人間性に「背の高さ」が混じりあっている。

(13) 例えば、「存在する猫」は、存在性のほかに、例えば白さを持っている。今この部屋に猫がいるかどうか、確かめるために、まず猫性という普遍概念を思い起こす必要がある。その次に猫性を持ったものが今ここにいるかどうかを考える手続きをとらなければならない。そこが、「猫は何であるか」と「今猫がここにいるか」という質問とそれに対する回答は違うように、自ずから「何性」と「存在性」という区別が出てくるわけで、存在性と「何性」とは違うものであることがわかる。また、卵はオムレツになったときに、「何性」は変わったが、「存在性」は残る。

(14) 「今年はいい年であった」というときに、比較的善い期間であったということの意味するが、その年にはどちらともいえないこと、あるいはちょっとぐらい悪いこともあったというふうに暗黙のうちに理解されるであろう。従って、「善い年」に「善性」でないものも加わっている。

(15) 例えば、「猫」という本性（「猫性」）は、猫性以外のもの（例えば、白さ）を含むことができない。

(16) 例えば、暗い部屋に光がさすと暗さが消えていく。明るさと暗さは正反対であるから、共存できない。

(17) 恒例によって人間が「理性的動物」と定義されるので、それに正反対のものは人間の中には共存できないというわけである。

(18) 例えば、「悪い人」というときは、その人の行いや考えが悪いのであって、人そのものが本質的に悪い

外からの何らかのものが混じり合うことはあり得ない。⁽¹⁹⁾したがって、悪は神について語られることはないのである。

320

同じく、悪は善の正反対である。ところで、善の特質は完全性において成立する。それゆえに、悪の特質は不完全性から成り立つ。ところで、先に示されたように（第28章）、神は普遍的に完全であるから、神において欠如や不完全性はあり得ない。したがって、神において悪はあり得ないのである。

321

さらに、あるものは現実態であることに応じて完全である。それゆえに、あるものは、現実態に欠けている分に応じて不完全であろう。したがって、悪は欠如であるか、あるいは欠如を含むものである。ところで、欠如の基体は可能態である。だが、神において可能態はあり得ない。したがって、悪もあり得ないのである。

322

その上、善が「万物によって欲求されるもの」⁽²⁰⁾であるとするなら、いかなる本性も、悪を悪である限りにおいて、忌避^{きひ}すると結論づけられるであろう。ところで、その自然本性的欲求の運動に反してあるものに内在する事柄は、強制されたものであり、不自然である。⁽²¹⁾したがって、各々のものにおいて悪とは、そのものにとって悪である限り、強制的なものであり、不自然である。それは、合成物においては、その事物のある点に関しては悪が自然本性的であり得るとしても。⁽²²⁾ところで、神は、すでに示されたように（第18章、19章）、合成物でもなく、神において何か強制されたもの、不自然なことはないのである。したがって、神において悪はあり得ないのである。

323

聖書もこのことを確証している。例えば「ヨハネの第一書簡」(1・5)は次のように語っている。「神は光であり、神において闇はまったくない」。そしてヨブ記(34・10)において次のようにある。「神には過ちなど、決してない。全能者には不正など決してない」。

のではない。悪い行いをやめれば、またよい人となる。こうしてみると、本質的に悪いものは一つも存在しないことになる。実際、悪魔でさえももとはよい天使であった。ものが存在するだけでも、それなりのよさがあるというわけである。

(19) 水と油が混じり合うことができないように、本質レベルでは悪と善は混じり合わないことになっている。

(20) アリストテレスの定義(Ethica Nic. 1094a3参照)。

(21) 例えば、野生動物は強制的に動物園において生活させられると生殖しない場合。

(22) 生まれつきの心臓病を持つ人は、魂は良くても身体に関しては悪は自然的である。

第40章 神はすべての善にとっての善であること

324

さらに前述のことから神はすべての善にとっての善であることが示される。

325

というのは、各々ものの善性とは、前述のように（第37章）、そのものの完全性である。ところで、神は端的に完全であるという理由から、その完全性によって、先において示されたように（第28章）、諸事物のすべての完全性を包含している。したがって、神の善性は、すべての善性を包含している。こうして、神はすべての善にとっての善である。

326

同様に、参与によって、一定の性質を持っていると語られるものは、それがそのように語られるのは、本質によってその性質を持っているものとのある類似性を持つ限りである。例えば、鉄は燃えていると語られるのは、それは火の何らかの類似性に参与する限りにおいてである。しかし神は、すでに示されたように（第38章）、本質的に善であるが、その他のすべてのものは参与的に善である。したがって、いかなるものも、神的善性と何らかの類似性を持つ限りでなければ、善とは語られないのである。したがって、神自身は、万物の善にとっての善である。

327

さらに、各々のものが欲求されるのは目的のためである。⁽²³⁾ところで善の特質は欲求されるということから成り立つのである。⁽²⁴⁾それゆえ、各々のものが、善であると語られるのは、それが目的であるか、あるいは目的へと秩序づけられるか、どちらかでなければならない。したがって、すべてのものが善の特質を得ているのは究極目的である。⁽²⁵⁾ところで、この究極目的とは、以下で証明されるように（第三巻 第17章）、神である。したがって、神はすべての善にとっての善である。

328

このことから、モーセに自らのお姿をお見せになることを約束しながら、「出エジプト記」(33・19)で神が次のように語られる。「わたしはあなたの前にすべてのわたしの善い賜物を通らせ [る]」。そして「知恵の書」(7・11)において、神の知恵について次のように語られる。「知恵とともにすべての善がわたしを訪れた」と。

(23) 例えば、店でパンを求めて買うのは、食べるためである。

(24) 欲求されるものは何らかの善（例えば、パンは美味しい）を持っている。逆に言えば、善を持っているものはすべて、欲求される。

(25) 原因の連鎖においては必ず第一原因がなければならないように（第13章参照）、目的（善）にも連鎖があって、第一目的（究極目的）がなければならない。例えば、麦を植えるのは、小麦粉を得るためである。小麦粉を作るのはパンを得るためである。この連鎖でパンは麦の究極目的にあたる。

聖フランシスコの太陽の歌

CANTICO DELLE CREATURE

こよなく高く 全能の善き主よ 賛美と栄光と誉れと すべての祝福は
あなたのもの いと高きおん方よ これらはみな あなたにのみ帰すべきものにして あなたの
のみ名を 呼ぶにふさわしき者は この世には ひとりもなし

ああ たたえられよ わが主 すべての被造物によって わけても兄弟なる 太陽
によって 太陽は昼をつくり 主は かれによって われらを照らす かれはなんとうるわ
しく なんと大いなる光輝を発していることか いと高きおん方よ かれこそは あなたの
み姿を宿す

ああ たたえられよ わが主 姉妹なる月と無数の星とによってあなたは それら
を天にちりばめ 光もさやかに気高く うるわしくつくられた

ああ たたえられよ わが主 兄弟なる風によって また 空気と雲と晴れたる空
と あらゆる天候とによって あなたは
これらの兄弟をとおして つくられたすべてのものを支えてくださる

ああ たたえられよ わが主 やさしい姉妹なる水によって
水は役立つこと多く 謙遜で とうとく 清らかなもの

ああ たたえられよ わが主 兄弟なる火によって
あなたは この兄弟で 暗き夜を照らしたもう
火はきわめてうるわしく 喜ばしく 力強く たくましい

ああ たたえられよ わが主 われらの姉妹 母なる
大地によって 大地はわれらをはぐくみ つちかい
種々の実りをもたらし 色とりどりの草と花とを生み出す

ああ たたえられよ わが主 あなたへの愛のために
ゆるし 病と苦しみを耐え忍ぶ者によって
幸いなこと 終わりまで安らかに耐え抜く者
かれはいと高きあなたより 永遠の冠をいただく

ああ たたえられよ わが主
姉妹なる肉体の死によって この世に生を受けた者

この姉妹よりののがれることはできない 災いなること
大罪のうちに死ぬ者 幸いなること
あなたのとうときみ旨を果たしつつ逝く者
もはや第二の死も かれをそこない得えないのだ

ああ すべての 被造物よ！！ 主をたたえ 祝し 感謝せよ
深く へりくだって 主に 仕えよ

Altissimu, onnipotente bon Signore,
Tue so' le laude, la gloria e l'honore et onne benedictione.

Ad Te solo, Altissimo, se konfano,
et nullu homo ène dignu te mentovare.

Laudato sie, mi' Signore cum tucte le Tue creature,
spetialmente messor lo frate Sole,
lo qual è iorno, et allumini noi per lui.
Et ellu è bellu e radiante cum grande splendore:
de Te, Altissimo, porta significatione.

Laudato si', mi Signore, per sora Luna e le stelle:
in celu l'ài formate clarite et pretiose et belle.

Laudato si', mi' Signore, per frate Vento
et per aere et nubilo et sereno et onne tempo,

per lo quale, a le Tue creature dàì sustentamento.

Laudato si', mi Signore, per sor'Acqua.
la quale è multo utile et humile et pretiosa et casta.

Laudato si', mi Signore, per frate Focu,
per lo quale ennallumini la nocte:
ed ello è bello et iocundo et robustoso et forte.

Laudato si', mi Signore, per sora nostra matre Terra,
la quale ne sustenta et governa,

et produce diversi fructi con coloriti fior et herba.

Laudato si', mi Signore, per quelli che perdonano per lo Tuo amore
et sostengono infrmitate et tribulatione.

Beati quelli ke 'l sosterranno in pace,
ka da Te, Altissimo, sirano incoronati.

Laudato s' mi Signore, per sora nostra Morte corporale,
da la quale nullu homo vivente pò skappare:
guai a quelli ke morrano ne le peccata mortali;
beati quelli ke trovara ne le Tue sanctissime voluntati,
ka la morte secunda no 'l farrà male.

Laudate et benedicete mi Signore et rengratiate
e serviateli cum grande humilitate.

Isidori Hispalensis (セビーリャのイシドルス), c.560-636

Sententiae Liber primus

Caput IV. Quod ex creaturae pulchritudine agnoscatur Creator.

4.2b. Ex pulchritudine circumscriptae creaturae, pulchritudinem suam, quae circumscribi nequit, facit Deus intellegi, ut ipsis uestigiis reuertatur homo ad Deum quibus auersus est, ut, quia per amorem pulchritudinis creaturae a Creatoris forma se abstulit, rursus per creaturae decorem ad Creatoris pulchritudinem reuertatur. (PL 83. 540)

「限られた被造物の美しさから、神がご自分の限りない美しさを感じ取るようにさせて下さる。そうして、人が神から離れたその同じ道をたどって神に立ち返ることができるようになるためである。そして、被造物の美しさへの愛ゆえに創造主の形相から疎外された人が、被造物の美しさを通して再び創造主の美しさに戻るることができるためである。」

(cf. H.U. von Balthasar, The Glory of the Lord, vol. IV, 342)

第41章 神は最高善であること

329

ところで、このことから神は最高善であることが示されている。

330

というのは、「⁽²⁶⁾種族の善は、一人の善よりも優れている」ように、普遍的な善はいかなる個別的な善よりも秀でているからである。なぜなら、全体の善と完全性は、部分の善と完全性よりも秀でているからである。ところで、神の善性と他のすべてのものとの関係は、普遍的な善と部分的な善との関係である。それは、神があらゆる善のうちの善であることがすでに示されているからである(前章)。したがって、神は、最高善である。

331

さらに、本質のゆえに何々であると語られるものは、⁽²⁷⁾参与のゆえに語られるものよりも、より真なる意味で語られる。ところで神は自らの本性のゆえに善であり、その他のものは、参与のゆえに善であることがすでに示されている(第38章)。

332

同じく、「⁽²⁸⁾各々の類において最高のものは、その類の中にある他のものの原因である。」なぜなら原因は結果よりもまさっているからである。ところで、すでに示されたように(前章)、神からすべてのものは善の特質をもらっている。したがって、神は最高善である。

333

さらに、黒色が混ざり合うことが少ないものほどより白いように、同じように悪と混ざり合うことの少ないものほど、より良いものである。ところで、神は悪と混ざり合うことがもっともないのである。それというのは、悪は神において現実態においても、可能態においても存在し得ないのであり、そしてこのことは神に、その本性上適合していることがすでに示されている(第39章)。したがって、神は最高善である。

334

ここから『サムエル記上』(2章2節)において「⁽²⁹⁾聖なる方は主のみ」であると語られている。

<比較研究>：カントにおける「最高善」

「[・][・]最高」という概念がすでに二義性を含んでいて、このことに留意しないと、無用の論争が生じかねない。最高のものは、最上のもの(supremum)を意味することもあれば、また完全なもの(consummatum)を意味することもある。前者は、制約がそれ自身無制約的であること、

(26) Ethica Nic., 1094b, 8.

(27) 例えば、「健康的である」というのは、動物について語られる場合と、食べ物について語られる場合。前者は本質上の語り方で、後者は参与的述語である。

(28) Metaphysica, 993b, 24-25. 「例えば、火はもっとも熱いものであるが、それは火がほかのすべてにとってそれらの熱さの原因であるからである」。

(29) “Sanctus”. 聖書において sanctus は「完全」ということを意味し、「聖別」されたもの sacer とは区別される。

つまり制約がいかなる他の制約にも従属しないこと (originarium) である。後者は、全体がそれと同じ種のいっそう大きな全体の部分ではないこと (perfectissimum) である。徳 (幸福であることに値すること) が、われわれにもっぱら望ましく思われるすべてのものの最上の制約、したがってまたわれわれのすべての幸福追求の最上の制約であり、したがって最上の善であることは分析論で証明された。」

(…)

「幸福と道徳性との厳密な一致の根拠を含む、全自然の原因でありながらも自然とは別なものが存在することもまた要請される。この最上の原因は、ところで、自然がたんに理性的存在者たちの意志の法則と合致することの根拠だけではなく、それらの理性的存在者が他をさしおいてこの法則を意志の最上の決定根拠とするかぎりにおいて、自然がこの法則の表象と一致することの根拠を含むはずである。いいかれば、自然がたんに形式から見た道徳と一致するだけでなく、それら理性的存在者の動因としてのその道徳性と一致することの根拠を、すなわちその道徳的志操に見合った因果性をもつ自然の最上原因が想定されるかぎりにおいてのみ可能であることがあきらかとなる。さて、法則の表象にしたがって行為する能力をもつ存在者は知性 (理性) 的存在者であり、この法則の表象にしたがうこのような存在者の因果性は、このものの意志である。とすれば、自然の最上の原因は、それが最高善のために前提されなければならないかぎりにおいて、知性と意志とを通じて自然の原因 (したがって創始者) である存在者、すなわち神である。したがって、最高の派生的善 (最善の世界) が可能であることの要請は、同時にある最高の根源的善が現にあること、すなわち神が存在することを要請するものである。」

『実践理性批判』第一部第二編 (弁証論) 第二章、導入と五 (坂部恵・伊古田理訳)

De Dei unitate

第42章 神は唯一であること

335

上記に示されたことから、神が一つでしかないことが明らかである。

336

というのは、最高の善なるものが二つあることはあり得ないからである。なぜなら、最高級で語られるものは、ただ一つのものにしか見出されないからである。ところで、神は最高善であることはすでに示されている (第41章)。したがって、神は唯一である。

337

さらに神は全くの完全性であり、神にいかなる完全性も欠けていないことがすでに示されている (第28章)。したがって、もし複数の神たちが存在するならば、このように完全なものが複数存在するのでなければならない。だが、このようなことは不可能である。というのは、もしそれら複数の

神のどれにもどんな完全性も欠けておらず、またそれに何の不完全性も混じり合っていないとする
と、これはあるものが端的に完全であるためには必要条件であるが、それら複数の神には相互に区
別されるものがなくなってしまうであろう。したがって、複数の神を措定することは不可能であ
(30)
る。

338

一つのことを措定されただけで十分に生じるものは、複数のものを通してよりも、一つのことを
通して生じることがよりよいことである。⁽³¹⁾ところで、事物に出来る限り⁽³²⁾最善の秩序がある。⁽³³⁾なぜ
なら第一作用者の力は、諸事物において諸事物を完全性へと仕向ける能力には欠かされることはな
いからである。ところで、万物は一つの第一原理に還元することで十分に完成させられるのである。

(30) この論証からして、多神教の神々は「不完全な」神であると帰結されうる。

(31) 例えば、自動車の運転は一人に一任したほうがよりよい結果が生じる。文章の作成も一人に任せただけのほうがよい場合もある。

(32) 本来優等比較級である“melius”はここで、相対最上級として「最善」という意味になる（イタリア語の“il migliore”を参照）。

(33) トマスは『神学大全』第一部第二十五問題第六項、「神はもっと善いことが出来るか」を参照。「神は為しうる無限の可能性を有していて、そのうちの一つを現実的に『為す』のである。これを被造物の側からいうならば、われわれが現実にもそのうちに存在している現実的の被造物世界は、すべての可能的世界のうちの一つにすぎず、神がそれを意志するならば、現実に存在する世界とは全然別の世界をも、神は造ることができるということを意味する。そこで次に問題になるのは、あらゆる可能的世界のなかから、特にこの世界が選ばれてこの世界が造られたのは何故かということである。それに対する解答の一つとして、あらゆる可能的世界のなかで最善なるものを神は選んでそれを現実的たらしめたという説である。つまり、あらゆる可能的世界のなかで、現実に創造された世界は『最善のもの』optimus であるということである。かかる思想の根源は既にプラトンのうちにみいだされるが、中世ではアベラルドゥスが明白にこの説を主張し、近世ではライプニッツ（1646-1714）によって主張されている。これを『最善主義』（オプティミズム）という。しかしトマスはこの説をとらない。なぜならば、もしも神がすべての可能的世界のなかから最善のものを選ぶとすれば、神の意志は対象の最善性によって決定され、創造における神の意志の自由は失われることになるからである。ゆえに創造における神の意志の自由が保たれるためには、最善主義は斥けられなければならない。神がすべての可能的世界のなかから特にこの世界を選んだのは、この世界がすべての可能的世界のなかで最善であるからではない。もしも神がそれを意志するならば、神はじっさいに造るこの世界よりも、もっと善い世界を造ることもできるのである。世界について妥当することは、世界のうちに起こるすべてのことごとについて妥当する。なぜならば、世界に起こるすべてのことごらは神の意志によって起こるのであり、それはすべて『神の為すところのことごとら』に属するからである。」（山田晶、『トマス・アクィナス』、中央公論社、521頁）。

『神学大全』より早い段階で書かれた『対異教徒大全』において、トマスは新プラトン主義に近い立場をとっているように見える。

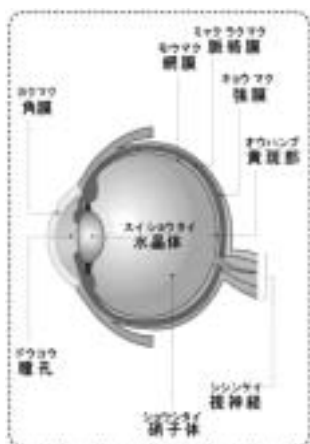
302 Creatio propriam habet bonitatem propriamque perfectionem, sed e Creatoris manibus prorsus absoluta non exiit. Creatura est «in statu viae» versus perfectionem ultimam adhuc obtinendam, ad quam Deus illam destinavit. Divinam appellamus providentiam dispositiones per quas Deus Suam creationem in hanc ducit perfectionem. (Catechismus Catholicae Ecclesiae). 「被造物は固有の善と完全性を備えているが、創造主から全く完成したのものとして造られたものではない。神が定めた、到達すべき究極の完成に『向かう途上』にあるものとして造られた。神がご自分の被造物をこの完成に向かって導かれるはからいのことを神的摂理と呼ばれる」（私訳）。

したがって、複数の原理を措定する必要はないのである。

“Rerum ordo est sicut melius potest esse”

「諸事物に出来る限り最善の秩序がある」

眼の構造



http://www.shinjo-ganka.or.jp/c_pres/shortsight/

眼の構造を調べて見ると、たくさんの器官からできていることが分かる。それぞれの部分に目的があり、隅々まで意味をもって構成されている。目的と意味をもたないものは何一つとして存在しない。どれもが驚嘆すべき精緻な構造をもっており、驚異的な知性によって考案されたことを示唆している。しかも崩れずに保たれるばかりでなく、発展・成長すらするのである。(山口實、『生命のメタフィジック』, TBS ブリタニカ 参照)

詩編139:13 あなたは、わたしの内臓を造り／母の胎内にわたしを組み立ててくださった。

139:14 わたしはあなたに感謝をささげる。わたしは恐ろしい力によって／驚くべきものに造り上げられている。御業がどんなに驚くべきものか／わたしの魂はよく知っている。

139:15 秘められたところでわたしは造られ／深い地の底で織りなされた。あなたには、わたしの骨も隠されてはいない。

139:16 胎児であったわたしをあなたの目は見ておられた。わたしの日々はあなたの書にすべて記されている／まだその一日も造られないうちから。

139:17 あなたの御計らいは／わたしにとっていかに貴いことか。神よ、いかにそれは数多いことか。

139:18 数えようとしても、砂の粒より多く／その果てを極めたと思っても／わたしはなお、あなたの中にいる。

宇宙論における人間原理 Anthropic Principle

<http://ourworld.compuserve.com/homepages/rossuk/c-anthro.htm> 参照

“Everything about the universe tends toward humans, toward making life possible and sustaining it”

Hugh Ross

「宇宙にあるすべてのものは生命を可能にし、それを保持することに向けられ、人間に向けられている」ヒュー・ロス

1. Gravity is roughly 10^{39} times weaker than electromagnetism. If gravity had been 10^{33} times weaker than electromagnetism, “stars would be a billion times less massive and would burn a million times faster.”

重力は電磁気より 10^{39} 倍弱いものである。もし重力が電磁気より 10^{33} 倍弱いものであれば、星は10億倍重くなくなり、100万倍速く燃えるだろう。

2. The nuclear weak force is 10^{28} times the strength of gravity. Had the weak force been slightly weaker, all the hydrogen in the universe would have been turned to helium (making water impossible, for example) .

核の「弱い力」は重力の力の1028倍である。もし弱い力がそれよりもわずかに弱かったならば、宇宙の水素はすべてヘリウムに変わる。(それにより例えば水の成立は不可能になる。)

3. A stronger nuclear strong force (by as little as 2 percent) would have prevented the formation of protons--yielding a universe without atoms. Decreasing it by 5 percent would have given us a universe without stars.

「核のストロングフォース」は、今より（2%ほどだけでも）強いものであれば、陽子の構成を妨げていたと思われる。それにより原子のない宇宙になってしまう。それを5%減少させると、星のない宇宙になっていたであろう。

4. If the difference in mass between a proton and a neutron were not exactly as it is--roughly twice the mass of an electron--then all neutrons would have become protons or vice versa. Say good-bye to chemistry as we know it--and to life.

陽子とニュートロンの質量の差が正確に今の状態、つまり電子の質量のおよそ二倍でなければ、ニュートロンはすべて陽子になっていたであろう。あるいはその逆になったであろう。そうになると私たちが今知っているような化学に別れを告げなければならなくなる。

5. The very nature of water--so vital to life--is something of a mystery (a point noticed by one

of the forerunners of anthropic reasoning in the nineteenth century, Harvard biologist Lawrence Henderson). Unique amongst the molecules, water is lighter in its solid than liquid form: Ice floats. If it did not, the oceans would freeze from the bottom up and earth would now be covered with solid ice. This property in turn is traceable to the unique properties of the hydrogen atom.

水（生命に非常に不可欠）の性質そのものは（19世紀に「人間原理」の先駆者のうちの一人であるハーバード大学の生物学者ローレンス・ヘンダーソンが指摘したように）かなり不可解なものである。分子の状態において独特な性質を持ち、水は液体の状態よりもその固体においてより軽いので水は浮かぶのである。もしそれがなければ、海洋は底から凍り、地球は今や固体の水で覆われているだろう。この特性は、今度は水素原子の独特な特性に帰することができる。

6. The synthesis of carbon--the vital core of all organic molecules--on a significant scale involves what scientists view as an astonishing coincidence in the ratio of the strong force to electromagnetism. This ratio makes it possible for carbon-12 to reach an excited state of exactly 7.65 MeV at the temperature typical of the centre of stars, which creates a resonance involving helium-4, beryllium-8, and carbon-12--allowing the necessary binding to take place during a tiny window of opportunity 10^{-17} seconds long. Taken from "God the Evidence" by Patrick Glynn

炭素（すべての有機分子の必須の中核）の合成は、重大な規模でストロングフォースと電磁気の比率において驚くべき一致があるとして科学者たちが注目するものを含んでいる。この比率は、ヘリウム-4、ベリリウム-8および炭素-12を含む反響を作り出し、星の中心において標準的な温度で炭素-12がまさに7.65の MeV の励起状態に達することを可能にする。その必然的結合は、長さ 10^{-17} 秒もの短い機会の間で起こる可能性がある。パトリック・グリンの証拠。

The fact that we are living and can observe the universe, implies that the fundamental constants must be "just right" to produce life. There is an element of circular reasoning here, because if the constants were not "just right", we would not be here to observe the universe. However, the fact is that the universe does not seem to be a random or chance event. We can postulate a many universe scenario, in which only one or some universes produce life, but we cannot validate that scientifically because we only live in one of those universes.

私たちが生きており、宇宙を観察することができるという事実は、基本の定数が生命を生産するには「ちょうどよい」でなければならないことを暗示する。ここに循環論法みたいなものがある。なぜならもし定数が「ちょうどよい」でなければ、私たちが宇宙を観察するためにここに存在していないであろう。だが、宇宙が任意なものあるいは偶然の事象であるようには見えないということも

事実である。私たちは多くの宇宙のシナリオ（1つあるいはいくつかの宇宙だけがその中で生命を生産する）を仮定することができるが、しかしそれらの宇宙のうちのたった1つにしか住んでいないので、私たちはそれを科学的に証明することができないのである。

339

さらに、一つの連続的で規則的な運動は、複数の動者によることは不可能である。なぜならば、もし複数の動者が同時に動かすならば、それらのどれも完全な動者ではなく、それらすべてが一つの完全な動者の代わりをしていることになるからである。だがこのことは、第一動者には適合しないのである。というのは、完全なものは不完全なものよりも先にあるからである。ところで、複数の動者が同時に動かしているのではないとしたら、それらのどれもが時には動かし、時には動かしていないことになるが、このことから運動が連続的でも規則的でもないということが帰結することになる。なぜなら、連続的で一つの運動は一つの動者に由来するものであるからである。さらに、常に動かしていないものは、不規則的に動かすことが認められる。それは、例えば下位の動者に明らかである。その動者において初めのほうは強制的な運動は強く動かし、終わりのほうに強制的な運動は除去される。ところが、自然界における運動はそれとは逆である。また、第一運動は一つで連続的であることは、哲学者たちによって証明されている。したがって、その第一運動の第一動者は一つでなければならない⁽³⁴⁾。

340

その上さらに、物的実体は、自らの善としての霊的実体へと秩序づけられている⁽³⁵⁾。なぜなら、物的実体が、霊的実体において善性はより完成されたものとして、それに類似したものとなることに向いているからであり、それは、存在するものすべてが可能な限り最善を欲するからである。ところで、物的な被造物の運動のすべては、一つの第一の運動に還元されることが認められ、その第一運動を除いて、いかなる仕方においてもそれに還元されえないような別の第一運動はあり得ないのである。したがって、第一の運動の目的である霊的実体を除いて、それに還元されえないような別の実体はあり得ないのである。ところで、このことを我々は神という名称をもって理解してい

(34) 第13章を参照。アリストテレスの自然学に基づいたトマスの運動論は現代の物理学、特に「慣性 (inertia) の原理」(Newton と Galileo) とは合わないといわれるが、これについての詳しい議論について J.F. WIPPEL, *The Metaphysical Thought of Thomas Aquinas*, CUA Press, 2000 を参照。日常生活におけるわかりやすい例でいえば、例えば手とラケットは同時にテニス・ボールを動かしているが、「手段的」動者であるラケットは第一原因である手がなければ動かすことはできない。

(35) ティヤール・ド・シャルダンによれば、宇宙の進化は「物質圏」から、「生物圏」(生命圏 バイオスフィア) へ、さらに、「精神圏」(ヌースフィア) へと向かっている。

(36) 例えば、人間の住居は持ち主のものの考えに合わされている。家屋の諸材料や家具、小道具は「素直に」主人に従っている。

る。したがって、唯一の神しかあり得ないのである。

341

さらには、相互に秩序づけられている異なったものすべてが、それらの相互の秩序は、何か一つのものへの秩序づけにかかっている。例えば、軍隊における諸部隊の秩序は、指揮官への軍隊全体の秩序づけにかかっている。というのは、ばらばらのものが、ある習性において一つになっていることは、それらが異なったものである限りにおいて、その固有の本性に基づくことはないからである。なぜなら、異なったものは、それによればむしろ一層区別されるからである。また、秩序づけるものがさまざまであることもできないのである。なぜなら、秩序づけるさまざまなものが、異なったものである限り、それら自身によって一つの秩序を意図することができないからである。このようにして、相互に異なったものの秩序は偶然によるものか、あるいは何か一つの第一に秩序づけるものへと還元され、それが、その他のものすべてを意図する目的へと秩序づけるか、である。ところで、この世界の諸部分のすべては、あるものが他のものによって助けられる限りにおいて、相互に秩序づけられている。例えば、月下の物体は上位の物体によって動かされ、この上位の物体は非物的実体によって動かされており、このことは、先に述べられたこと（第13章・第20章）から明らかである。だが、このことは、偶然によるものではない。というのは、それは常にあるか、あるいはたいていにおいてあるからである。したがって、この世界全体は秩序づけるもの、統治するもの一つしか持たないのである。しかし、この世界の外に別の世界はない。したがって、万物の支配者はただ一つしかないのであって、これを我々は神と呼ぶ。

342

その上更に、両方が「必然的な存在」であるところの二つのものがあるならば、両者は存在の必然性という概念においては一致しなければならない。それらが区別されるのは、一方だけに、あるいは両方に付加される何かによってでなければならない。そうしてみると、一方が、あるいは両方が合成物になってしまうのである。だが、合成物はどれも、それ自体によって「必然的な存在」ではないのであり、このことは先に示されている（第18章）。したがって、それぞれに「必然的な存在」であるところの複数のものは不可能である。それゆえに、複数の神々もありえないのである。

343

なおさらに、二つのものが存在の必然性において一致していると措定されていることから、それらが相違している点は、その存在する必然性のある仕方において充足させるものとして必要とされるか、あるいはそうではないのかのどちらかである。もし、充足に必要とされないものであれば、それは付帯的なものであろう。というのは、ある現実足されるすべてのものが、その現実の存在性に何も寄与しないのであるならば、付帯的なものだからである。それゆえに、この付帯的なものは、原因を持つのである。

a)

その原因は、「必然的存在」の本質であるか、あるいは別の何かである。前者なら、上述されたことから明らかなように（第22章）、その存在の必然性そのものが必然的存在の本質であるということから、存在の必然性自体がこの付帯性の原因になるだろう。だが、存在の必然性は、両方の場合において見出されるから、両方がその付帯性を持つことになるだろう。それゆえに、両方がそれに基づいて区別⁽³⁷⁾されないことになる。

b)

それに対して、もしその付帯性の原因が本質以外の別の何かであるならば、その別のものが存在しない場合は、この付帯性も存在しないだろう。そして、この付帯性が存在しないのであれば、前述の区別も存在しないことになる。したがって、もし、その別の何かが存在しないのであれば、「必然的存在」として措定された二つのものが二つではなく、一つである。それゆえに、それら両者に固有の存在は他のものにかかっていることになる。そうだとすると、そのどちらもそれ自らによって「必然的な存在」でなくなるのである。

c)

ところで、もし二つのものが区別される点が、存在の必然性を充足させるために必要であれば、これは存在の必然性の概念に含まれるからであり、例えば、生気が動物の定義に含まれるようなものである⁽³⁸⁾。あるいは、存在の必然性が、それによって特種化されるからであり、例えば、動物が理性によって充足されるようなものである。

d)

もし第一の場合であれば、存在の必然性があるところはどこにでも、必然性の定義に含まれるものがなければならない。例えば、動物ということが適合するどのようなものでも、生気が適合するのと同じように⁽³⁹⁾。こうして存在の必然性は、前述の二つのもの両方に述語されているから、それに基づいて区別されることはできないのである。

e)

ところで、もし第二の場合であれば、これもまた不可能である。なぜなら、種を特種化する種差は、類の概念を充足させるのではなく、種差によって類にとっての現実態における存在を獲得されるからである。というのは、動物の概念は、理性が加えられる前に完全であるが、理性的か、ある

(37) Kretzman, op. cit. p. 163参照。

(38) “Animatum” は、“anima” に由来する語であるが、英語の“animation”（例えば、「アニメ映画」）に見られるように、「静止していない」、「動く」、「生きている」というほどの意味もある。肺があり息をしている動物（animal）が死ぬと息をしなくなるので、魂と息はつながっていると思われていた。

(39) 例えば、虎（*Felis Tigris Mongolica*）とサナダムシ（*Amphilina foliacea*）は、どちらにとっても本質的な構成要素である「動物性」や「感性」という点では区別されない。

いは非理性的かどちらかということなしに、現実態の動物ではあり得ないのである。⁽⁴⁰⁾したがって、何かが存在の必然性を充足するというのは、現実態における存在に関してであって、存在の必然性の概念に関してではないということになる。

f)

しかし、これは二つの点において不可能である。第一に「必然的な存在」の何性は、自らの存在であることは、すでに論証されている（第18と22章）からである。第二に、「必然的な存在」が他の何らかのものによって存在を獲得することになってしまうからである。しかし、それは不可能である。

g)

以上のことから、それぞれが自らによって「必然的な存在」である複数のものを指定することは不可能である。⁽⁴¹⁾

二つの必然的な存在者（AとB）の相違点は、	
イ）存在を充足させる	
ロ）存在を充足させない	
ロ）なら、相違点は	
α）本質から由来するか β）本質とは別のものから由来するか	a)
α）なら、→AとBは区別できなくなる	
β）なら、→存在しない可能性を含むから必然的存在者ではない。	b)
イ）なら、相違点は	
1°）必然性の定義（本質）に含まれるか 2°）存在者の必然性を特種化するか	c)
1°）なら、区別できない。	d)
2°）なら、不可能である。	e)
2°） a 現実態の必然性には一種類しかないから。	f)

344

その上更に、もし二つの神があるならば、この「神」という名称は両者について同名同義的に述語されるか、あるいは同名異義的に述語されるかのどちらかである。

(40) ここで「現実態の動物」という条件に注目することは重要である。非理性的動物そのものが存在するのではなく、それはいつもトラかサナダムシかその他非常に具体的なものでなければならない。さらに、存在するのはトラやサナダムシではなく、いつも、この虎、あのトラでなければならない。

(41) Kretzman (op. cit. p. 161-165) は343項を現代的な論理学の観点から分析して、この論証は成功していると結論付けている。

a)

もし同名異義的であれば、それは今の論の目的から外れる。というのは、どのような事物も、それはどのような名称で同名異義的に名付けられても、語る者の慣用が認めるならば、妨げるものはなにもないからである。⁽⁴²⁾

b)

それに対して、もし同名同義的に語られるというならば、両方の神について一つ概念にもとづいて述語されていることになる。そうすると、両者において概念上一つの本性がなければならない。したがって、この本性は両者において一つの存在に即してあるのか、あるいは、互いに別々の存在に即してあるのかのどちらかである。⁽⁴³⁾もし一つの存在に即してあるならば、それゆえ、二つのものが存在するのではなく、ただ一つのもが存在することになるだろう。というのは、二つのものが実体的に区別されるならば、それらに一つの存在が属することはないからである。それに対して、両者において、別々の存在があるならば、それゆえ、そのどちらにとっても自己の何性は自己の存在ではなくなるだろう。ところが、すでに証明されたように（第18と22章）、神においてはまさに自己の何性は自己の存在であると措定すべきである。それゆえに、上記の二つの神がどちらも、我々が「神」という名称で理解しているものではないのである。したがって、二つの神を措定することは不可能である。

345

a)

さらに、個別的な指示対象に対して、それが個別的な指示対象である限りにおいて、適するいかなる指示も、他のものに適合することはできない。⁽⁴⁴⁾なぜならば、何らかの事物の個性は、その個性を離れて別のものに属することはないからである。ところが、「必然的存在」の場合、それが必然

(42) 例えば、Ray Charles という歌手は、Soul の「神様」と呼ばれる。

(43) 例えば、同じ部屋に猫二匹があるとしよう。同じ種類の動物が今二匹ここに存在すると考えるときに、やはり概念上同じ本性をもっているものを考えるであろう。ところが、二匹の猫がまったく同じ毛皮の模様をもっているとしよう。そのとき、一匹の猫が走り回って、二匹があるかのような錯覚を与えるか、それとも実際に二匹がいるのかと戸惑った場合、やはり「一つの存在に即してあるのか」、つまり存在者が一つなのか二つなのかと考え込んでしまうであろう。イギリスと米国には York と呼ばれる町がある。それは実体的に二つの存在に即して語られることを明確にするために、一つには New という名称が付けられている。

(44) 映画館で予約した席をさがす時に、F 列25番席というような指示で、指示対象を定める。すべての存在者の中で「神」を言い当てるためには、「必然的存在」という指示を使用することがある。ところが、先に指示対象があって、それを正確に探し当てるために F 25 という特定の指示表示を使わなければならないように、必然的な存在があって、それを正確に指示するために、その必然性を取り上げなければならない。けれども、「必然的存在」という言い方を使った場合、それは自ずと一つしかないということが必然的に帰結される。同じ映画館では F 25 席は一つしかないだろうと想定されるのと同じように。唯一の本当の神を探求することがこの作業に似ている。

的な存在である限りにおいて、指示対象が適合するのである。それゆえに、それが何か別のものに適合することは不可能である。このようにして、そのいずれにも「必然的存在」ということが属しているような複数のものが存在することは不可能である。したがって、複数の神々が存在することは不可能である。

海戦ゲーム (艦隊を狙え)

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	L	M	N
1												
2												
3												
4												
5												
6												
7												
8												
9												
10												

旗艦 (5コマ) 1隻



軍艦 (3コマ) 3隻



しゅうてい 舟艇 (2コマ) 5隻



自分

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	L	M	N
1												
2												
3												
4												
5												
6												
7												
8												
9												
10												

相手

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	L	M	N
1	X	X	X									
2		O	O	X								
3		X	X									
4												
5												
6												
7												
8												
9												
10												

プレイの仕方

両プレイヤーは自分の紙に10X12のマス目を書く。そのマス目の隣に将棋盤やチェス盤のような行番号をつける。このマス目を海戦図に見たててプレイする。

ゲームの開始前にそれぞれのプレイヤーは戦艦の三種類を配置する。自分の紙の任意のマス目にそれぞれの戦艦を示す記号をつける。

自分の海戦図をゲーム中は相手から隠し、配置は相手に知られてはならない。同じマスに複数の艦を配置することはできない（相手プレイヤーの艦と位置が重なっても構わない）。

配置が完了したらじゃんけんなどで順番を決め、交互に行動を選択する。自分の番がまわってきたプレイヤーは、魚雷による攻撃を発する。任意のマス目を一つ指定し攻撃することを相手に伝える。相手プレイヤーは自分の海戦図で指定したマス目を調べ、そこに自分の艦がある場合は、攻撃が命中したとして攻撃したプレイヤーに伝える。

ゲームをやっていくと、試行錯誤しながら、相手の戦艦を沈没させるためには、一つ一つのマス目を正確に言い当てる難しさに気づく。当たってもそれは5マス目の戦艦なのか、2マス目なのかを知らないで、「個別的な指示対象」の「唯一性」が直感的にわかってくる。

b)

小前提の証明。もし「必然的存在」の個別的な存在が、その必然的なものとして指示されないのであれば、指示がその存在に即して必然的ではなく、他のものに依存しているものでなければならぬ⁽⁴⁵⁾。ところが、いかなるものも、その他すべてのものと区別され、個別的な指示を受けられるのは、

(45) 映画館には二階があって、それぞれの階の席に同じ名称を割り当てているとすれば、F25では席を突き止めるためには不十分であって、「一階F25」と考えなければならない。その場合、個別的な存在指示は、「階」という別のものにかかっている。

現実態にある限りにおいてである。それゆえに、存在することが必然的であるものは、現実態において存在するためには、他のものに依存することになる。しかし、これは「必然的存在」であるものの概念に反している。したがって、「必然的存在」は、個別的な指示対象であることに即して「必然的存在」でなければならない。

346

その上更に、「神」というこの名称によって意味表示される本性は、この神において、それ自身によって個体化されるか、その他のものによって個体化されるかのどちらかである。もし他のものによるものであれば、神には合成がなければならないことになってしまう。したがって、もし個体化がそれ自身によるものであれば、その本性は他のものに適合することは不可能である。というのは、個体化の原理というものは複数のものに共通であることはできないからである。⁽⁴⁶⁾したがって、複数の神々が存在することは不可能である。

347

さらに、もし複数の神々が存在するならば、神性という本性は両方において、数的に一つでないことになる。したがって、この神やあの神において神的本性を区別する何らかのものがなければならない。だが、これは不可能である。というのは、すでに示されたように（第23、24章）、神的本性は、本質的差異の付加も、付帯的差異の付加も受け入れることはできないからである。⁽⁴⁷⁾また、神的本性は、何らかの質料の形相として、質料の分割に即して分割されるものでもない。⁽⁴⁸⁾それゆえに複数の神々は存在することは不可能である。

348

同じく、各々の事物に固有な存在性はただ一つである。⁽⁴⁹⁾ところで、神はそれ自身、自らの存在であることは、先に示されている（第22章）。したがって、一つの神しか存在し得ないのである。

349

その上更に、事物が存在を有する様態は、それが一性⁽⁵⁰⁾を有する様態に即している。それゆえに、各々のものは、自らが分割されることのできる限り抵抗し、⁽⁵¹⁾そうすることで非存在に向かわないよ

(46) 例えば、ベルト・コンペアーで作られたものを区別できるために、整理番号が付けられる。その場合、時間的に「より先」に作られたというのが個体化の原理である。

(47) 卵は鶏となるために「本質的差異」を受け入れなければならない。また「ゆで卵」となるためには熱という付帯的差異を受ける。

(48) 複数の卵が同じ「卵性」をもっている。

(49) 例えば、レオナルド・ダ・ビンチの「モナ・リザ」という絵画の存在性はひとつしかない。また、「英領ギアナの1セント切手」、世界に一枚しか現存していない切手がある。

(50) 「一性」は存在者が存在するための形而上学的条件となっている。例えば、二つに割れた卵は、卵としての存在を失う。英語の UNIT という単語がこの考えに由来すると思われる。UNIT とは、「分割不可能の単一実在」（小学館プログレッシブ英和辞典）となっている。

(51) 例えば、「羅和辞典」は一個の製本となっていて、それを二つに裂くためにかなりの力がいるし、裂いた後はまともな羅和辞典としての存在の一性は失われ、もとに戻すことは不可能に近い。

うにしている。ところで、神的本性は最も強力な仕方 で存在を有している。したがって、神的本性において最も強い一性がある。それゆえに、いかなる仕方においても複数のものへと分割されることはないのである。

350

さらに、我々は各々の類において多数のものが、ある一性から出て来ていることを見出す⁽⁵²⁾。それゆえに、あらゆる類において第一のものが見出され、それがその類に見出されるすべてのものの尺度である⁽⁵³⁾。したがって、ある一つのことがらに一致を見出すいかなるものも何か一つの原理に依存している⁽⁵⁴⁾のでなければならない。ところが、万物は存在という点において一致している。したがって、万物の原理となるものがただ一つなければならない。これが神である。

351

同じく、どのような統治権 (principatus) においても、支配する者は一性を欲求する。それゆえに、統治形態のうちで最も強力なものは、専制君主制か王政である。またさらに多くの四肢からなるものには一つの頭があるのであって、そこでこの明確な証拠によって、統治することに適合する者に一性を与えるべきことが明らかである⁽⁵⁵⁾。したがって、万物の原因であるところの神は端的に一つであることを認めなければならない。

352

ところで、神の一性についてのこの告白を聖なる言葉からも我々は受け取ることができる。実際、『申命記』(6・4)において「聞け、イスラエルよ、我々の神、主は唯一の主である」と語られ、『出エジプト記』(20・3)において「あなたには、私をおいてほかに神があってはならない⁽⁵⁶⁾」、そして「エフェソの信徒への手紙」(4・5)において「主は一人、信仰は一つ…」などであるのである。

353

さて、この真理によって多数の神々を承認する異教徒たちは反駁される。

a)

ところが、彼らの多くは最高位にある神が唯一であると述べており、神々と名付けられる他のすべてのものが、それを原因として存在すると主張したりしていたのである⁽⁵⁷⁾。そして、すべての永遠の実体に神性の名称を付与し、特にそれらの知恵、幸福、諸事物に対する支配力のゆえである。

(52) 例えば、人類はアダムとイブという一つのカップル (先祖) から出てきたという考え。

(53) 例えば、基数という類には1が最初に見出され、それが他のすべての数の尺度となる。

(54) 英知大学の学生は、英知大学に属しているという一つの原理に束ねられ、それ以外に共通点はないといえる。もし英知大学が存在しなくなれば、英知大学の学生も存在しなくなる。

(55) 現代の民主政治でも、やはり国の大統領や首相は一人でなければならないことになっている。

(56) 『申命記』32・39参照。

(57) 例えば、Zeusと天照大神。

b)

確かにこの語り方の習慣は、聖書においても見出され、そこで聖なる天使あるいは人間たちや士師たちが神々と名付けられている。例えば「詩編」(86・8)⁽⁵⁸⁾の言葉において「主よ、あなたのような神は神々のうちになく…」とあり、別の箇所では「わたしは言った〈あなたたちは神々なのか〉…」(82・6)とある。このような多くの言葉が聖書のさまざまな箇所にみられる。

354

それゆえに、この真理にさらに矛盾しているのが、マニ教徒であると思われる。彼らは両者のうちの一方が他方の原因でないという二つの第一原理を措定している。

355

さらに、アリウス派も自分たちの誤りによって、この真理に反対していた。つまり、彼らは聖書の権威に基づいて御子は真なる神であることを信じるように強いられていたため、御父と御子は一つの神ではなく、複数の神々になると主張している。

神の唯一性 (第42章の17の論拠)

1. 336. 「最高善」Summum Bonum 最上級の使用
2. 337. 二つの完全なものは、相互に区別がつかない。
3. 338. 万物は一つの原理に還元されるのはもっとも合理的である。
4. 339. 連続的な運動(変化)が第一動者をもたなければならない。
5. 340. 運動の目的(霊的実体)は一つでなければならない。
6. 341. 相互に秩序づけられている多様なものに支配者が一つ。
7. 342-343 それ自体として必然的な存在は二つありえない。
8. 344. 「神」という名称の同名同義的、同名異義的使用。
9. 345. 「必然的な存在」の「指示対象」は一つである。
10. 346. 神の本性の個体化。
11. 347. 神的本性は複数のものにあてはまるなら、形相になる。
12. 348. 固有な存在の唯一性。
13. 349. 存在の様態(modus)の唯一性。
14. 350. 多様性が一性から出てくるという原理。
15. 351. 政治団体と四肢の一性。
16. 352. 聖書の根拠。
17. 353. 多神教にも「主神」がある。

(58) Vulgata Clementina, 85・8.

一神教と多神教の人間論的側面

Anthropological Aspect of Polytheism and Monotheism

「^{ひとよ}一生には一人のひとをおもはむにほとほと足らぬ生命とおもふ」(五島美代子)人は一生のうち何人もの人を愛せる。この考え方の土台には人という器を無限、その愛を有限とする無言の前提がある。ところが、この歌は逆。一人の人を愛するのに人の一生ではまったく足りないというのだ。人は有限、愛は無限。(読売新聞、2006年1月30日朝刊、2頁参照)。となると、多神教は「浮気性」のように見えてくる。一人の人を愛するのは足りないので、多数を求める。しかし、日本をはじめ世界中に見られる「一夫一妻」の制度が示すように、何世紀も積み重なった知恵として、人間の本当の充実感は一人の人を一生愛しようとするところにある。

神々と幸せ

「人間は『幸せ』という理念を、構想力や感覚と絡み合った悟性によって、実にさまざまな仕方で構想してみるばかりでなく、しばしば変更するもので、仮に自然が人間のほしいままの意志に完全に服従しているとしても、各人がそれぞれ任意に設けるところの目的に合致することは絶対に不可能であろう」(カント、『判断力批判』、83章)。同じ所で同時に雨が降り、天気になることは不可能である。幸せになるために神の力をかりたい時、矛盾する願いを複数の神に託することは多神教の起源であるかもしれない。古代の人たちが神々を、それぞれの能力に関して、あるいはその意図に関してさまざまに思ったものの、主神すら例外なく、人間と同様に制限されていると考えたことは理解できると、カントは言う(『判断力批判』、85章参照)。古代ギリシア人は、自然における物の仕組みや経過をよく考察して、確かに機械的なもの以上の何か或るものをこの世界の諸現象の原因と想定して、また世界の機械仕掛け(例えば、天候の移り変わり)の背後に、或る種の最高原因、すなわち彼らには人間以上のものとしか考えられないような原因を推定するに十分な根拠を見出したのである。しかし彼らはまた世界において善と悪、合目的なものと反目的なものが、少なくとも人間の目には、著しく錯綜していることを知った。そしてその根底には賢明でかつ仁慈な目的(人間の幸せ)が隠されているということを知ることができなかった。自然の限られた資源と科学的法則と人間の精神性を総合的に考えて、矛盾することなく、世界の仕組みを説明するために、ヘブライ思想から来た「人格的な創造主」という考え方を待たなければならなかった。創造主なる神は「悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせ」(マタイ5、45)ながら、正義と愛に基づいて全世界を支配している。カントによれば、ギリシア人にとっては合目的に結合された多数のものの統一を考えることが困難であったので、この統一を一個の実体に因果的に依存させずに、多様なものにおける付属性(Inhärenz)の統一に至った。こうして世界における一切の存在者が唯一の実体に付属しているという観念から汎神論に至った。東洋思想においても同じような考え方は見られるが、問題の解決になるというよりは、準備(予備学)の用をなすにすぎない。

A Modern Interpretation of “Summa Contra Gentiles” (6)

Andrea Bonazzi

Tomoko Kitagawa

- 37: That God is Good
- 38 : That God is His own Goodness
- 39 : That in God there can be no Evil
- 40 : That God is the Good of all Good
- 41: That God is the Highest Good
- 42 : That God is One

Not only God is Good; he is goodness itself, the good of every good, and the highest good. These predications move from the concrete to the abstract and back to the concrete mode of signifying. Thus, Thomas moves from what can be said of God and creatures, to what can be said only of God. Then he turns to God as the ontological ground (“good of every good”), and transcendent exemplar (“highest good”). Thomas thus deploys Aristotelian means to an end embraced explicitly only in the Platonic tradition. Aristotle does refer to the life of God as most fully actual and most pleasant. Yet, in spite of his definition of the good as that which all desire, he never identifies God as exemplar of the good life. For Thomas, the speculative pursuit of first causes is identical to the practical pursuit of the good.

Thomas then argues that God is one. He argues that (1) that there cannot be two highest goods, (2) that two perfect beings would be indistinguishable, and (3) that there cannot be many first movers. The logic of necessary being requires singularity. Among the sixteen arguments for uniqueness, “the most powerful and interesting” (N. Kretzman), rely for their basis in the identification of God as the entity that is necessary being through itself. Formally, the uniqueness argument is a chain of destructive dilemmas designed to reduce to absurdity the assumption that there is more than one God, where God is understood as that which is necessary being. The argument supposes that there are two entities, E1 and E2, each of which is necessary being. The argument’s strategy for reducing that supposition to an absurdity consists in exhausting all possible bases on which E1 and E2 might be distinguished from each other.

For instance, E1 and E2 could represent two species of that which is necessary being, carved out of that genus by two differentiae. Suppose, then, that D* is E1’s differentia, carving the E1 species out of the genus “necessary being”. But in that case nothing could be necessary being through itself any more than anything could be just “animal” rather than a tiger or a tapeworm or some other sort of animal: “animal cannot be in actuality unless it is either rational or non-rational”. If necessary being required D* as a differentia, then necessary being would acquire being through something else, which is contradictory with the notion of necessary being.

D* could be thought of as a component of “the ratio of necessity of being as animate is included in the definition of animal”, which Thomas understands to be ‘sensitive animate body’.

But, of course, no such essential component of E1 and of E2 could serve as D* any more than sensitive, animate, or corporeal could serve as a characteristic distinguishing a tapeworm from a tiger, and so also this possibility is easily dismissed.

N. Kretzman, after a detailed analysis based on formal logic, concludes: "I think the uniqueness argument succeeds".